

1920-30年代、ブエノスアイレスにおけるロベルト・アルルトの「発話」の位置

高際 裕哉

El lugar de enunciación de Roberto Arlt en 1920 y 1930 en Buenos Aires

Yuya TAKAGIWA

Resumen

El presente artículo pretende describir el contexto socio-cultural de los años 1920 y 1930 en Buenos Aires y dentro de ese marco determinar, aclarar y explicar el lugar de enunciación del escritor argentino Roberto Arlt (1900-1942). Se propone asentar una premisa para analizar la obra del autor.

Primero, el artículo cubre el ingreso de Arlt al mundo de las letras. Con la ayuda de Ricardo Güiraldes, Arlt publicó algunas partes de su primera novela *El juguete rabioso* (1926) en la cosmopolita revista literaria de vanguardia, *Proa*. Después, Arlt consiguió trabajo como cronista en el periódico *El Mundo* en 1928.

Segundo, se echa una mirada al contexto socio-histórico de Argentina en el que Arlt vivió. Argentina, y sobre todo Buenos Aires, gozaba de prosperidad y de la llegada de la modernización, pero aún tenía problemas que solucionar, sobre todo relacionados a la población, producto de las oleadas de inmigrantes de las décadas anteriores.

Tercero, en el artículo se analiza el cambio que hubo en el mundo de las letras, tanto en los periódicos, las revistas como en la literatura. El contexto socio-histórico de la época hizo surgir nuevos actores dentro de los textos y de los círculos de escritores. En el mundo de la literatura, por ejemplo, existe una polémica que enfrentó a dos grupos: la vanguardia estética, Florida, y la vanguardia política, Boedo. La postura de Arlt frente a estos dos grupos es compleja de determinar. El artículo propone revisar su posición dando en cuenta la relación íntima entre el mundo del periodismo y el de la literatura de la época.

Cuarto, el artículo cierra con algunos ejemplos de la calidad que tienen los textos de Arlt y reafirma la necesidad de investigar sus crónicas para entender la naturaleza de su obra y de su personalidad como escritor.



目次

0. はじめに
1. 『怒りの玩具』(1926) の出版からクロニスタへ
2. ブエノスアイレスの喧騒：都市の人口変動と政治体制の変化
3. 1920-30年代における都市・大衆・活字メディア

- ア：新たな大衆と活字文化の勃興
- 3.1. 雑誌・文芸誌の時代
- 3.2. 新興新聞の勃興
4. アルルトとクロニカ
5. むすび

0. はじめに

本稿はアルゼンチンの作家、ロベルト・アルルト (Roberto Arlt: 1900-1942) のアルゼンチン文学における位置づけを、先行研究に依拠しつつ、ロベルト・アルルトの作家研究および作品研究をする際の基礎的な前提として確認することを目的とする。とりわけ、アルルトの作家研究ではサブジャンルとして扱われがちな、新聞に掲載していた「クロニカ」(作家の自由度の高いコラム欄)の方向性に主眼をおく。

日本ではアルルトの存在はわずかに知られるに留まっている。一方アルゼンチン文学におけるアルルトに関する研究の蓄積には相当なものがある。日本語圏においても、近代の世界的同時性とアルゼンチンのローカルな当時の文脈を念頭に置けば、アルルトが文筆家として持っていた資質は間違いなく評価されるものだろう。

アルルトは、1920年代から下層中産階級からアルゼンチン文学の文壇・ジャーナリズムの世界に参入した作家である。アルルトはある時代性を背負ったブエノスアイレスで育った。その時代性とは、アルゼンチンが19世紀末から20世紀初頭までに経験した大量の移民の導入と、人口構成の極端な変化である。その人口構成の急速な変動に伴い社会が経験した諸変化・諸反応を本稿ではさしあたり「特殊な近代」と呼ぶことにしよう。

アルルトが今でも評価の対象となっている理由の一つに、アルルトが1910年代から1930年代を作家独自の視点と文体で活写した点が挙げられる。アルルトは非スペイン語圏からの移民二世である¹。当時のブエ

ノスアイレスで文化資本と呼べるもののない家庭に育ったアルルトは、新しいアルゼンチンの子どもたちの一人であった。生前は新聞のクロニスタ(自由度の高いコラム欄の専従作家)として人気を獲得し、没後には主にフィクションの分野で再評価され、現在に至るまでいくつもの学術論文や新たな資料が出版されている²。

本稿で問題にしたいのはテキスト分析をするにあたり、1920年代から1930年代にかけてアルゼンチンの活字出版の世界でアルルトの「発話」はどのような文脈でなされ、またどの方向性を持って発されていたのかという点である³。端的に言えば、「アルゼンチン文学史」の中でのアルルトの位置を明らかにすることのだが、しかし、アルルトの活動は小説・戯曲の文学作品にのみ限られるわけではない。作家は新聞でおおよそ1,500に上るクロニカを残している。したがって、アルルトの文筆活動の足跡を包括的に明らかにするためには、文学作品のテキスト分析のみでなく新聞メディアに発表されたクロニカを含む必要がある。そのことを通じてアルルトの作家性、つまり「特殊な近代」の諸側面を切り取り、独自の方法でテキストを編むという特質がより鮮明なものとなるだろう。

本稿は、1.でアルルトが文壇に参入し、またその後新聞社付きのクロニスタとして参入したまでの経緯を述べる。社会派として位置づけられるアルルトだが、デビューしたのは前衛のコスモポリタン文芸誌 *Proa* 『プロア』(1924-26)を通じてであった。デビューした直後に新興新聞のクロニスタとして職業作家に変わったアルルトは、フィクションの作家である以上に、日刊紙の誌面に毎日原稿を寄稿するクロニスタであっ

た。3.の序としてこれらの前提を確認する。

2.では、アルルトが文壇に参入した際のアルゼンチン、とりわけブエノスアイレスの歴史的社会的状況を確認する。当時のアルゼンチンは19世紀後半からの移民の波が一段落したものの、都市の人口が爆発的に増加する一方、1929年の世界恐慌を迎えるまで空前の好景気を迎えていた。それに伴い急速な都市の変容と、近代技術があらゆる側面から生活を変えた「新たなもの」が流入する時代を経験する。

3.では、都市が変容する一方、新聞・雑誌・文壇が以前の時代とは異なる新たな段階に入ったことを概観する。3.1.ではその都市の変容の経験が深く刻まれた場所で、詩人・作家たちが文学を通じて何を試みようとしていたのか、文芸誌の潮流として大まかにわけて二つの流れがあったことを確認し、その中でアルルトがどのような位置からテキストを発信していたのかを明らかにする。この点が本論考の主たるテーマである。3.2.では先に述べた詩人・作家たちが新聞メディアに参入した経緯をあきらかにし、最後に、4.でアルルトが具体的にその状況でどのようなテキストを残したのか簡潔に触れ、筆者ののちの作家研究のための基礎的なテーマを提示し、論考を閉じたい。

1. 『怒りの玩具』(1926) の出版から クロニスタへ

アルルトは非スペイン語圏からの移民二世としてブエノスアイレスで育った。家庭は決して裕福ではなかった。この点はアルルトが当時のアルゼンチンの文学・言論の世界で活動する際、アルルトの立場を規定する大きな要素となる。

頻繁に言及されるのが、アルルトは公教育を小学校の高学年でドロップアウトした後、公立、あるいはアナキストが作った図書館に足しげく通い、文学やその他の科学技術への知識を自前で、教育制度の体系とは違う形で身につけていった人物であったということだ。アルルトは中でも特に文学に魅了され、短編小説やエッセイを書き始めた。1920年、アルルトが

20歳のころ、新聞、*Tribuna Libre* 紙に“Las ciencias ocultas en la ciudad de Buenos Aires”「ブエノスアイレスにおけるオカルト科学」というエッセイを投稿し、同紙に1920年1月28日付で掲載されている⁴。

1920年に新聞にエッセイが掲載された後、アルルトは兵役につきコルドバへ向かう。アルルトは1925年前後、ブエノスアイレスに帰還すると、左派の出版社 *Claridad* 「クラリダー」に小説を持ち込むが、文体が稚拙だと理由で出版を拒否される (Capdavia, 2002: 228)。その後リカルド・グイラルデス (Ricardo Güiraldes: 1886-1927) のもとを訪ねる。グイラルデスはアルルトに私設秘書の身分を保証し文章作法の手ほどきをした (Saïta, 2000: 26, 33)。

グイラルデスは当時パリ、とりわけヴァレリー・ラルボー (Valery Larbaud, 1881-1957) との親密な関係があった。グイラルデスは国外と接点を持つコスモポリタンであり、同時にナショナルなものを表象しようとする当時の文壇エリートを体現するような作家であった⁵。グイラルデスは非スペイン語圏からの移民二世のアルルトを受け入れ、文壇へ参入するために力を貸した。

アルルトは1925年グイラルデスが編集委員を務めていたコスモポリタンかつ前衛的な性格を持つ文芸誌『プロア』にデビュー作の一部を2作品掲載している⁶。その後、1926年、デビュー作の長編小説 *El juguete rabioso* 『怒りの玩具』を出版する⁷。上記で言及した1925年から1926年の間に、『プロア』を通じてアルルトは文壇の若手作家としての足掛かりを得たことになる。ここで重要な点は、「社会派」を自任していたアルルトがデビューする足掛かりとなったのは、前衛的文芸誌であったという点だ。

アルルトは文壇にデビューしてほどなく、1927年、新興新聞 *Crítica* 『クリティカ』の犯罪記事担当記者として採用される。その後、活動の場を1928年に新聞 *El Mundo* 『エル・ムンド』の創刊に併せて同紙のクロニカ欄の専属作家として採用される。この仕事はアルルトが1942年に没する直前まで続けられる。当初は無記名の記事であったが、その文才を買われ、記

名記事となり、アルトは数年のうちに同紙の売り上げにも大きく貢献するクロニスタとなった。

以下で問題にしたいのは、アルトが前衛文壇に参入し、その後新聞のクロニカ執筆を主たる活動としながら文学の領域でも旺盛に活動していた、その言論界の当時の状況である。以下ではその時代的な背景、特に人口変動のありよう、およびそれに影響され文化の状況、とりわけ雑誌・新聞の媒体がどのような変化を遂げたのかについて述べる。

2. ブエノスアイレスの喧騒： 都市の人口変動と政治体制の変化

アルゼンチンの首都、ブエノスアイレスは空前の経済的繁栄を享受し、19世紀後半の大きな人の移動があった。1914年にとられたセンサスからは急速な人口増加が見受けられる⁸。移民史研究者のフェルナンド・デボトによれば、アルゼンチンの移民流入期は三つの段階に分けられるという。一つが18世紀から1880年まで、第二に1881年から第一次世界大戦に至るまでの大量の移民流入期、第三に、第一次大戦以降から現在に至るまでの時代である (Devoto, 2003: 11-15)。アルトが育った時代、つまりデビュー作の『怒りの玩具』の舞台となった時代は移民流入期の第一期に相当すると考えてよい。またアルトが執筆活動をした1920年代後半から1942年までは第三の時期に相当するが、それでもなお、ブエノスアイレスの人口増加による都市問題は山積した状態であった。国策として導入されたヨーロッパからの移民たちの流入によって、アルトが育ったころ、1914年のブエノスアイレス市 (ブエノスアイレス都市圏) の人口の三分の一は外国生まれであった⁹。また、総人口も飛躍的に増加した。少なくとも1914年と1947年に二度取られたセンサスからは、国内総人口は33年間でおおよそ790万人からおおよそ1,600万人と、ほぼ倍になっている。また人口増加のスピードから想像がつくように、都市整備が追いつくようものではなく、行政による都市計画がすすめられたものの、そのスピードを凌駕

する勢いで移民たちが集住する新たな“barrio”「街区」が新たに生まれていった。

その間、アルゼンチンは政治的な変革を経験する。1912年、男子普通選挙法のサエンス・ペーニャ法が制定され、都市の中産階級に支持基盤を持つ急進市民連合 (Unión Cívica Radical) から出馬したイポリト・イリゴージェン (Hipólito Yrigoyen) が1916年に大統領に選出される。

1916年の時点では社会的変革を望んでいた都市部中産階級が、世界第三位の経済大国となったアルゼンチン史上最高の好景気の恩恵を受け経済的に安定し、引き続き押し寄せる移民に対して、防衛機制を働かせ、ナショナリスティックな風潮が現れると同時に急進市民連合政権への失望が起こった (Montaldo, 2006a: 25-26)。1929年の世界恐慌のあおりを受けると同時に、それまで不満を募らせていた寡頭支配層とカトリックの後ろ盾を得たホセ・フェリックス・ウリブル (José Félix Uriburu: 1868-1932) 首班の軍部クーデターにより、1930年、急進市民連合政権は崩壊する¹⁰。この時代、1916年から1930年にかけてブエノスアイレスはあらゆる側面で「新たなもの」が流入する変化の時代を迎えていた。

3. 1920-30年代における都市・大衆・活字メディア：新たな大衆と活字文化の勃興

1907年に行われた大学改革の結果、ブエノスアイレス大学では1913年、リカルド・ロハス (Ricardo Rojas: 1882-1957) によりアルゼンチン史上初の「アルゼンチン文学」の講座が開講されるようになった。ロハスは1913年に出版した *Historia de la literatura argentina* 『アルゼンチン文学の歴史』の中で新たに「国民文学全体を貫く文化的古層としての『ガウチョ文学』」をとりあげ、移民たちが集ったアルゼンチンで、新たな国民的同一性を立ち上げるためのジャンルとして「ガウチョ」を参照するべきアルゼンチン文学の古典と措定した (林, 2003: 344, 347-348)。続いて1918年にコルドバ大学で起こった大学改革を皮切りに、ア

ルゼンチンの大学講座に海外からの知識人が招かれ、またヨーロッパの新たな知的潮流が流入し若い学生・知識人を刺激し始めた(Montaldo, 2006b: 31)¹¹。つまり、短期間の間に国民的同一性を担保するシステムとしての国民文学が立ち上げられ、それから間もなく欧米の知の潮流が「新たなもの」として流れ込むという状況があった。

知の世界での地殻変動が起こる一方で、都市の人口編成の変化と合わせて、ある程度の同化政策と識字教育が国策として成功した結果、移民たちが新たな「大衆」としてブエノスアイレスに姿を現した。その新たな大衆はあらたな読者層として位置づけられ、彼らに向けられた新たなスタイルの新聞・雑誌・文芸誌が次々と創刊される時代がやって来る(Sarlo, 1988: 18-19)¹²。その中で、旧来は読者層に位置づけられていた下層中産階級出自の人間たちが作家として新たな流れを立ち上げようとする。彼らが注目したのは身近に存在した社会の問題・姿を文学でどのように表現するかという点にあった。

以上の点を踏まえ、以下ではまず、「文壇」の視点から文芸誌間で1920年代に存在したとされる審美的なフロリダ派、社会派のボエド派の立場の違いと共通していた点を明らかにしたい。

3.1. 雑誌・文芸誌の時代

この二つの流れ、知識人世界での知の変動の影響を受けたコスモポリタンの作家たちの存在と、新たな社会派文学の登場はアルゼンチンの文学史の中で1920年代、審美的な傾向を持つフロリダ派と社会的な問題を主題としていたボエド派の二極が存在したというトピックとして現れる。

この問題は作家グループ間の直接的な対立というよりも雑誌の編集方針の問題だと考えたほうが理解しやすい。具体的には文芸誌 *Martín Fierro* 『マルティン・フィエロ』(1924-1927) がフロリダ派の牙城であり、文芸誌 *Los Pensadores* 『ロス・ペンサドール』(1922-1926) およびその後続誌 *Claridad* 『クラリダー』

(1926-1941) がボエド派を代表する雑誌である。両者ともに前衛たる姿勢を標榜してはいたのだが、それが芸術的刷新を目指すか、文学を通じた社会参加を目指すかの二つの方向に分かれていた。

芸術的前衛のフロリダ派『マルティン・フィエロ』の目指すところは、「新たな感覚と新たな理解」を提示することであると、1924年、詩人のオリベリオ・ヒロンド(Oliverio Girondo: 1891-1967)が同紙に掲載したマニフェストに記している(Saitta, 2006b: 694)。ここに上に挙げたアルゼンチンの大学を中心とした知的潮流の変化を読み取ることができるだろう。雑誌は文学領域の自律性を頑なに信じていたことが編集方針を記したテキストから読み取れる。また、編集の方針として絶対的だったのは政治や社会問題を文化的な領域に持ち込まないという点にあった。

同紙の書き手の多くは、文化資本を持った家柄の出身であり、旧来の知識人やヨーロッパとの関係も近かった。ヨーロッパ型の基本的なモデルでは芸術的前衛とは先行する世代との断絶と新たな美学の創造を志向するものだ。『マルティン・フィエロ』の先行する世代とはモデルニスモの詩人たちであったが、雑誌ではモデルニスモの創始者ルベン・ダリーオ(Rúben Darío: 1867-1916)と、レオポルド・ルゴネス(Leopoldo Lugones: 1874-1938)への文学に対する敬意は折に触れて見つけることができる(Gilman, 2006: 49)。つまり、先行する世代と完全に断絶したとは言い切れない。また審美的な次元に文学をとどめる姿勢はモデルニスモ以降の「美的領域の自律性」を信じる系譜に連なる。このことには当時のアルゼンチン文壇が抱えていた特殊な事情が反映されていた。批評家のベアトリス・サルロによれば、文芸誌 *Nosotros* 『ノソトロス』紙が国家の近代プロジェクトと知識人の言説に近い領域にあり、それに対し文学・芸術の自律性を求めたのが『マルティン・フィエロ』に代表される審美的な前衛主義の文学運動であったという(Sarlo, 1986: 214-216)。審美的前衛が政治に触れないことには時代的な限定があった。

一方、ボエド派は前衛が抱えていた問題からは無関

係で、比較的一貫した姿勢を持っており、文化を政治化すること、社会的な問題を文学の題材とすること、民衆に対して啓蒙的であることを趣旨としていた。執筆陣は旧来の知識人のモデルからは離れた、都市の下層中産階級出身の新たに文壇に参入しようとした書き手たちが多く集まった。アルトもこのグループに合流する。先行するアルゼンチンの知識人とは活動の範囲を異にしていたため、断絶すべき存在はいなかった。1920年代は移民の波が一段落した時代であったとはいえ、“conventillo”「貧乏長屋」がまだブエノスアイレスに存在しており、無視できない社会問題が山積していた。彼らはそれらの社会状況に介入する文学の社会的役割を信じていた。

両者は文学的なビジョンを根本的に異にしており、激しい対立があったわけではない。両者の間に論争があるとすれば、ボエド派の作家ロベルト・マリアーニ (Roberto Mariani: 1893-1946) が『マルティン・フィエロ』 (No. 7, Julio, 1924) に寄稿した文章である。そこでマリアーニは『マルティン・フィエロ』を反抗精神のなさ、1924年の時点でファシズムをすでに標榜していたレオポルド・ルゴネスに対する寛容な態度、クリオーリョ主義の不当な専有を問題にした (Gilman, 2006: 52)。しかし『マルティン・フィエロ』はそのエッセイに対して政治的進歩主義と美学的進歩主義はお互いの中で満場一致で認められていることだと論争を終わらせた (Ibid.: 52)¹³。

審美的前衛と政治的前衛の作家たちの態度が存在していたという点は認識しておかなければならないが、フロリダ派とボエド派を雑誌の編集方針以外からわけること、つまり個々の作家の特質や、文体の性質まで拡大することが適切だとは考えられない。トゥニオン兄弟と同じく、社会派を自認していたアルトのフィクションの文体は実験的なものが多く見受けられる。確かにアルトのデビュー作はリアリズムへの傾斜を持つものであったが、典型的なリアリズムのそれとは一線を画していた (Capdavia, 2002: 225-226)¹⁴。

この対立以前に、前衛雑誌『プロア』の執筆陣を見る限り、文学に対する態度の幅は広い。ラテンアメリ

カ各国からの文人らも編集委員に名を連ね、ゲイラルデスのように既に文壇で確固たる位置を獲得していた作家、ボルヘスのようなまだ20代のコスモポリタンの文学的前衛、また、前衛であったが同時に社会的なものを志向し、明確に左派の路線を打ち出すこととなる作家・詩人のラウル・ゴンサレス＝トゥニオン (Raúl González Tuñón: 1905-1974) が共存していた状態であった。雑誌の編集方針として、若い作家・読者たちに広く開かれた文芸誌を目指していたことが明言されている (Saítta, 2009b: 696-697)。同時期に出版されていた『マルティン・フィエロ』 (1924-1927) とはやや編集方針が異なっていたようだ。

ボルヘスは『プロア』 (No.15, 1926年1月) に「パンパと郊外は神である」というエッセイを掲載している。そこでボルヘスは、アルゼンチンの伝統的な文学的トポスとしてパンパがあり、もう一方で現在生まれつつあるものが“las orillas”「郊外」であると主張する¹⁵。

ボルヘスに依れば、その系譜はタンゴで歌われる“el arrabal”「場末」に始まり、エバリスト・カリエゴ (Evaristo Carriego: 1883-1912) が「場末」の悲哀を詩に変え、ボルヘスみずからが彼に続き“las afueras”「郊外」の風景を詩に変えたと自認する。続いて同時代人の「ロベルト・アルトとホセ・タジンは“arrabal”のふてぶてしさと狂暴性そのものである」と指摘し「私たち一人一人が“subrbio”『郊外』の切れ端を語ってきた。誰もその総体を語りきってはいない」(傍線筆者)と述べている (Borges, 2011: 16)¹⁶。

ボルヘスが言及した「私たち」の中にアルトが入っていることは間違いない。手法を異にすることを理解しながらも同時代の作家として、アルトを同じ「郊外」を描く作家として認識していた。それと同時にこれから展開される「郊外」の表象の可能性について語っている。しかし日本語で「郊外」を意味する語に対し様々な単語を当てているボルヘスの記述から読み取れるように、この時点で肥大する都市の「郊外」のイメージは多義的であり、書き手によって、時代や主題、またその描き方は大きく異なる。この後、ボル

ヘスとアルルトは対照的と言ってよいほど異なる手法でブエノスアイレスの「郊外」を描く¹⁷。

アルルトが描く「場末」・「郊外」に関しては、以下で論じる新興新聞との関係が大きく影響していた。そのことは4.で確認する。以下では新興新聞の勃興とアルルトの位置に視点を移したい。

3.2. 新興新聞の勃興

20世紀初頭までのアルゼンチンを代表する新聞として、1870年に創刊され、イスマノアメリカ各国の文人が数多くの論考を寄稿していた高級紙、*La Nación*『ラ・ナシオン』が挙げられる。対象となる読者は知識人、政治家、実業家、大学関係者などであった。大地主階級や寡頭支配層とも相性はよく、保守的な新聞として位置づけられる。

それに対抗するように新たな読者層または「大衆」に向けられた新聞が創刊された。1913年に創刊された日刊紙『クリティカ』と1926年に創刊された『エル・ムンド』である (Saïtta, 2009a: 245-246)。これらの新聞は若い詩人や作家たちを積極的に文化面、スポーツ面、犯罪記事などの記者・書き手として登用した¹⁸。

『クリティカ』は、1913年の創刊時から、センセーショナルな話題を取り上げることが旨としており、犯罪のみならず社会問題も取り扱っていた。また大衆向けの新聞として労働者の世界も取り扱った (Mongone, 2006: 71)。同紙は1925年頃から若い前衛詩人・作家たちをジャーナリスト、あるいは文化批評の記者として招き入れた (Saïtta, 2009a: 255-256)。彼らのほとんどはボルヘス、アルルトと同じまだ20代の詩人・作家たちであった¹⁹。アルルトは同紙の犯罪記事担当として1927年からおよそ一年間記事を寄稿していた²⁰。

『クリティカ』に関して特筆すべきなのは、大衆に向けて創刊された、同紙の土曜文化版、*Revista Multicolor de los Sábados*『土曜日カラー刷り雑誌』の編集が、1936年から1939年の間、ウリセス・ペティ・デ・ムラ (Ulyses Petit de Murat) とともにボルヘスに託されていた点である (Saïtta, 2009a, 245)²¹。若い前

衛詩人・作家たちは、『クリティカ』が1925年の時点で高級紙『ラ・ナシオン』と同じ部数の日に30万部を誇っていることを知っており、彼らが参加する前衛雑文芸誌の読者も新聞の読者から獲得しようとしていた。

新たな新聞は前衛詩人・作家たちを誌面作りに呼び込み、専業作家としての位置を確保させ、また、作家たちは新聞を通じて自らの文学活動を一般に広く知れ渡るものとしようと試みていた。文学の領域の自律性を立ち上げようとする前衛たちもまた、象牙の塔に閉じこもっていたわけではなかった。この時代の特徴は社会派・審美的前衛問わず文学と大衆メディアの緊密な相互依存関係にある。審美派にせよ社会派にせよ、1920年代以前には専業の文筆家として生きる糧を得る雑誌、新聞などの出版システムが十分に整っておらず、ようやくその手段が新興新聞の登場により確保されたためだ (Sarlo, 1986: 214)。

アルルトが創刊時抜擢された『エル・ムンド』紙も『クリティカ』の後を追うように、前衛・社会派両派の詩人・作家たちを誌面作りに起用し、1928年の創刊から1年足らずで、当初40,000部であった発行部数を127,000部まで伸ばした (Sarlo, 1988: 20)。編集の仕方は特徴的で、タブロイド版の誌面に視覚効果に訴えるため、ビジュアルな要素を組み込む写真を多く取り込み、見出しはわかりやすく、また記事の長さも比較的短く、わかりやすさを旨とした編集方針が取られていた。「多様性と世界の同時性」を広い読者に伝えることが新聞の方針として挙げられている²²。『エル・ムンド』はアルゼンチン初のプチ・ブルジョワジー向けに創刊された新聞であったという (Mongone, 2006: 74)。

もし、この新聞がプチ・ブルジョワジー、つまり都市部のホワイトカラーの賃金労働者、教員、技術者などに向けられていたのが真だとするならば、第一次産業産品の輸出で世界経済に参入したアルゼンチンにおいて、一貫した政治的立場をとる労働者階級とは対照的に、経済状況によって政治的立場が左右される読者を相手にしていたということだ。この文脈でアルルト

は、短編小説を様々な一般向け雑誌に送る傍ら、1942年に没するまでほぼ毎日『エル・ムンド』紙にクロニカを書き続けた。アルトの発話の位置は其中でどのように位置づけられるのか。以下ではアルトが記したクロニカの1930年代前半に至るまでの性質を概観し、その中からいくつかの例を挙げ、その特質を論じたい。

4. アルトとクロニカ

アルトが書いたクロニカのテーマは多岐にわたるが、1928年から1930年代の半ばに至るまでは主に、ブエノスアイレスの中心部や周縁部の見聞録、街場に流通する新語の問題、文学・映画文化について、また読者からの投書に応える形式で書かれた書簡体のクロニカを記していた。特に初期に関してはブエノスアイレスの見聞録を多く書いている。また、自ら取材して社会問題に取り組んだクロニカも見られる。このクロニカ執筆の際に経験したことからアルトのテキストを特徴づける「特殊な近代性」の記述への傾斜が規定された。また、アルトは社会派の作家たちと近い関係を持つことになった。

アルトのクロニカは独特の統語、語彙を含む文体を持ちながら、独自の批判精神に貫かれていると言われる。統語、語彙に関しては稿を改めなければならないが、批判のあり方の一例を挙げる。ロベルト・レタマソによれば「人形の修理工房」(1928年9月5日付)で、アルトは街を歩きながら、人形の修理工房が街に何軒もあることに気づき、都市に人形が大量に存在することを想像する。人形の存在は「永遠の保守派」の「貪欲さの感情あるいは感傷主義」の表れだと断じている。この点からレタマソはアルトのクロニカはプチ・ブルジョワジーの価値観へ批判的な視点を持っていたと述べる (Retamaso, 2002: 307)。

先に述べたように『エル・ムンド』は都市の新興中産階級に宛てられた新聞であったとされる。そうでありながら、ブルジョワ的規範を身に着けはじめた都市の新興ホワイトカラーに対して皮肉の効いた言葉を

投げかけるアルトのクロニカは人気を博し、1933年には同紙に掲載されたクロニカ選集、*Aguafuertes porteñas*『ブエノスアイレスのエッチング』が単行本として出版される。

また、3.1.で論じたボルヘスの「郊外」論に話を戻したい。アルトは、フロリダ派が敬意を払っていた文壇のエスタブリッシュメントかつ、当時完全なファシスト的国家社会主義者に転じていたレオポルド・ルゴネスに対し、マニフェストと読み取れるクロニカを記している。「ボエド派」の名前がここで姿を現してくる。1928年12月21日付『エル・ムンド』紙に掲載された“El conventillo en nuestra literatura”「我らが文学における貧乏長屋」である。

アルトはルゴネスが「ポリシェビキ主義に感化された悲劇を描くことに心血を注ぐ」社会派作家たちを嘲ったことに触れる。ルゴネスが「ポリシェビキ主義者」だとみなしているのは、ロベルト・マリアーニ、レオニダス・バルレッタ、エリアス・カステルスオボ、ゴンサレス・トゥニオン兄弟とアルト自身だと、アルトは述べ、アルトたちは「この都市の生活を悲しくする汚れたもの」を扱っており、そのグループは「ボエド派と呼ばれる」若い左派の作家たちだと明言している (Arlt, 1996: 390-391)。ここでアルトは自らを左派の社会派作家であり「ボエド派」の一員であることを自己規定している²³。

アルトはルゴネスを政治的な立場を何度も変えながら、興味があるのは美文を書くことだけだと断じ、社会派作家たちがとりくんでいることには意義があると主張する。アルトは自らの育ちが“conventillo”「長屋だらけの貧民街」ではないことに言及しながら、職業作家としてその場に赴き、その現状の劣悪さには言葉を失わざるを得ないと述べる。しかし、そうであるからこそ若い世代の作家たちはその姿を刻むことに心血を注いでおり、そのことは美文だけに文学的価値を見出す先行する世代の代表ルゴネスには理解ができないのだと結論付ける (Ibid.: 392-393)。

1920年代当時すでに存在しなかった、人口増加以前の19世紀末のブエノスアイレスに「郊外」の粗型

を見出し、そこを文学的トポスと変えたボルヘスたちとは異なり、社会派作家たちは増殖する主に移民たちが住まう、新興の *barrio* 「街区」の問題をテーマに文学を描いていた。

アルルトもクロニスタとして貧民街を描くことがあり、書く分野はクロニカでありながらも、文学の中に社会性を織り込もうとした作家たちの中に自らを位置づけている。おそらくこの自己規定は、アルルトがデビュー作からクロニスタとして成熟する中で認識を深めたことを意味している。連作小説 *Los siete locos* (1929) 『七人の狂人』・*Los lanzallamas* (1931) 『火炎放射器』では明らかに移民たちの街区を貧困の場として物語の舞台として織り込んでいる。

批評家、ダビッド・ビーニャスによれば、アルルトのクロニカは、ブエノスアイレスの様々な場所で見かけたものに対して「対象がわき起こさせる興味に従って、病状を分析する」性質があり、そのことは1930年当時アルゼンチンには存在しなかった社会学をアルルトのクロニカの「ジャーナリズムに由来する印象主義」的性質が肩代わりしていたことに触れている (Viñas, 1998: 9)。

当然クロニカは作家性が要求される。アルルトに関してはその視点と文体の技巧が評価される。ただ、一方で、アルルトはクロニカで取材記事を掲載していたことにも触れておかなければならない。筆者が確認した限り、その代表的なものとして、1933年1月12日から2月14日にわたって継続的に病院の劣悪な環境を告白した取材記事“*Hospitales en la miseria*”「悲劇の中の病院」が挙げられる。アルルトはブエノスアイレス市行政が病院の問題を放置していたことを若い医師たちと協力した取材に基づき告発している (Arlt, 1998: 439-444)。

ブエノスアイレスの都市計画と文化的空間の変遷を分析したアドリアン・ゴレリックは、新興新聞で刷新が図られたクロニカという一ジャンルは1920年代から1930年代にかけてブエノスアイレスに新しく生成しつつあった“*barrio*”「街区」に文化的な意味を与え、可視化し、政治問題化することに寄与したと述べる

(Gorelik, 2010: 309-310)。

1934年3月26日から7月2日まで、アルルトは連載クロニカのタイトルを通常のタイトルであった“*Aguafuertes porteñas*”「ブエノスアイレスのエッチング」から“*La ciudad se queja*”「憤る都市」に変えた。その中で都市問題を扱ったクロニカを集中的に執筆・発表した²⁴。ゴレリックは「憤る都市」でアルルトが行ったことは「地方行政権力が街区の問題を放置していることを告発するため、ニュースの生産の方法と方向性に派手な変化を引き起こすことで介入した。そのことで街区は、拡大する都市の中でも存在を切り離せない部分として位置づけられ、また、都市の最も特徴的な部分であるという位置を獲得した」と評価している (*Ibid.*: 310-311)。

アルルトはクロニスタとして、常に変貌する都市、ブエノスアイレスの諸相を日々様々な手法で切り取り続けた。そのことはおそらく、ブエノスアイレスという肥大化し続ける都市の中に生まれる分断を可視化しテキストの上でその諸相を読者に届ける作業であったのではないか。

5. むすび

本稿では、アルルトはフィクションの作家であると同時に、同時代的には新聞にクロニカを連載する文筆家として名前が知られた存在であった点に焦点を当て、その同時代における「発話」の位置と、アルルト研究に際して、クロニカの重要性に注目した。

審美的前衛が「ハイ・カルチャー」の大衆化を試みる一方で、政治的前衛・社会派作家たちは現前する社会的問題を文学の形で提示しようとしていた。その二つの文学的な流れがあった時代、アルルトは職業的な要請から「社会派」としてブエノスアイレスが経験していた「特殊な近代」の諸問題に直面せざるを得ず、そのことはアルルトがフィクションを書く際の問題意識を規定したと考えられる。

高際、2016ではアルルトが1929年と1931年に出版した連作小説『七人の狂人』と『火炎放射器』にお

いて、小説内の虚構的言説の中に同時代的現在を参照するためのインデックスとして、しばしば頁末脚注の中に同時代のニュースが挿入されていることを指摘し、それは虚構的言説を現実世界の出来事と結びつける蝶番の役割を果たしていることを論じた。筆者はアルトのフィクションの読解を通じて、作品における「同時代性」に対する言及の意義を論じたが、アルトの日々の職業的要請からクロニカがそれを記述することを作家に課していたことは明らかである。

そのことと関連して、ロベルト・レタマス、またステイブン・スローンは、アルトのフィクションにはかなりの程度クロニカで記したことが織り込まれていること、またクロニカの文体も文学的言語をもって記されていることを指摘している (Retamaso, 2002: 299-301) (Sloan, 2003: 160-172)。つまり、アルトのフィクションを論じる際も、クロニカとしての経験は分けて論じることができない。

アルトが「社会派」を自任しながらも、フィクションの世界ではリアリズムに陥ることなく、独自の、小説を一読するとモダニズムあるいは文学的前衛との連関が読み取りうる文体を編んでいたのは、おそらくク

ロニカの取材・執筆経験に裏付けられたアルトの作家性によるものだ。フィクションにおけるモダニズムに近い独自の文体については稿を改めて論じなければならない。ただ、おそらくその文体はクロニカの執筆を通じて練り上げられ、同時代な経験を表現するために編み出されたものであるはずだ。

アルトのテキストは日本語圏読者の読解にも耐えうる「近代性」を刻んだものだと筆者は信じる。それを記述するためには逆説的なようであるが筆者のアルト研究はあくまで生きた時代の諸状況をできる限り把握にしながら、その文脈の中でアルトのフィクションおよびクロニカが持っている特殊性を明らかにしなければならない。

その前提として本稿ではアルトの、とりわけクロニカの側面からの当時の言説編成の中での「発話」の位置を確認した。そのことで、アルトの作家研究を行い、その「特殊な近代性」に対する鋭敏な知覚感覚と文体を位置づけるためにはフィクションとクロニカの双方向の読みが必要であることを認識した。アルトのクロニカの特徴の分析、またそれに続くフィクションの分析が今後の課題として残る。

引用文献

- Arlt, Roberto, *Obras, TomoII: Aguafuertes*, Buenos Aires: Losada, 1998
 Borges, Jorge Luis, “La Pampa y el suburbia son Dioses” en *Proa 1924-1926: (Año 2, No.15, enero de 1926)*, Edición facsimilar, Buenos Aires: Biblioteca Nacional, 2011, 14-17

参考文献

- Borges, Jorge Luis (*et al.*), *Proa 1924-1926: Edición facsimilar*, Buenos Aires: Biblioteca Nacional, 2011
 Capdavia, Analía, *Las novelas de Arlt: Un realismo para la modernidad*, en Gramuglio, Teresa María (dir.), *Historia crítica de la literatura argentina vol.6: El imperio realista*, Buenos Aires: Emecé, 2002, 225-244
 Devoto, Fernando, *Historia de la inmigración en la Argentina*, Buenos Aires: Sudamericana, 2003
 Gilman, Claudia, *Florida y Boedo: Hostilidades y acuerdo*, en Viñas, David (dir.), *Yrigoyen entre Borges y Arlt (1916-1930): Literatura argentina sigloxx*, Buenos Aires: Paradiso, 2006, 44-62
 Gorelik, Adrián, *La grilla y el parque: Espacio público y cultura urbana en Buenos Aires 1887-1936*, Buenos Aires: Universidad Nacional de Quilmes, 2010
 Retamaso, Roberto, *Roberto Arlt: Un cronista infatigable de la ciudad*, en Gramuglio, Teresa María (dir.), *Historia crítica de la literatura argentina vol.6: El imperio realista*, Buenos Aires: Emecé, 2002, 299-319
 Saïtta, Sylvia, *El escritor en el bosque de los ladrillos: Una biografía de Roberto Arlt*, Buenos Aires: Sudamericana, 2000

- . (2009a) *Nuevo periodismo y literatura argentina*, en Manzoni, Celina(dir.), *Historia crítica de la literatura argentina vol.7: Rupturas*, Buenos Aires: Emecé, 2009, 239-263,
- . (2009b) *Catálogo de revistas (1904-1938)*, en Manzoni, Celina(dir.), *Historia crítica de la literatura argentina vol.7: Rupturas*, Buenos Aires: Emecé, 2009, 683-704,
- Sarlo, Beatriz, *Vanguardia y criollismo: La aventura de “Martín Fierro” en Altamirano*, Carlos. Sarlo, Beatriz, *Ensayos argentinos: De Sarmiento a la vanguardia*, Buenos Aires: Ariel, 1986, 211-260
- . *Una modernidad periférica: Buenos Aires 1920-1930*, Buenos Aires: Nueva Visión, 1988
- Sloan, Steven P., *Modernity and Marginality: The Destruction and Renovation of the Latin American City and Writer in the Chronicles of Joao do Rio, Lima Barreto and Roberto Arlt*, Michigan: UMI Dissertation Services, 2003
- Mongone, Carlos, *La república radical: Entre “Crítica” y “El Mundo”*, en Viñas, David (dir.), *Yrigoyen entre Borges y Arlt (1916-1930): Literatura argentina sigloxx*, Buenos Aires: Paradiso, 2006, 63-89
- Montaldo, Graciela (2006a), *El origen de la historia*, en Viñas, David (dir.), *Yrigoyen entre Borges y Arlt (1916-1930): Literatura argentina sigloxx*, Buenos Aires: Paradiso, 2006, 24-29
- . (2006b), *Consagraciones: Tonos y polémicas*, en Viñas, David (dir.), *Yrigoyen entre Borges y Arlt (1916-1930): Literatura argentina sigloxx*, Buenos Aires: Paradiso, 2006, 30-43
- . (2006c), *El 7 de septiembre*, en Viñas, David (dir.), *Yrigoyen entre Borges y Arlt (1916-1930): Literatura argentina sigloxx*, Buenos Aires: Paradiso, 2006, 314-323
- Yasushi, Ishii. *The Figure of the Subject: Severed Expressive Flow and Emerging Middle Voice Agency in Argentine Literary Discourse of the 1920s and 1930s*, Michigan: UMI Dissertation Services, 2000
- Viñas, David, *Las “Aguafuertes” como autobiografismo y colección*, en Roberto Arlt, *Obras. TomoII: Aguafuertes*, Buenos Aires: Losada, 1998, 7-32
- Walter, Richard J., *The Province of Buenos Aires and Argentine Politics, 1912-1943*, Cambridge: Cambridge U.P., 2002 (1985)
- 高際裕哉、「反射される現在—口バルト・アルトの長編小説『七人の狂人』と『火炎放射器』における註釈の一つの機能」、『東京外国語大学大学院博士後期課程論叢 言語・地域文化研究』、第22号、2016年1月、59-78
- 林みどり、「『アルゼンチン文学』の誕生と文化的実践としての読書」、明治大学人文科学研究所紀要、第52冊、2003、339-353

註

- 1 アルトの両親の出身地は父親がポーランド、当時はプロイセンの一部であったポズナニ、母親はイタリア、当時はオーストリア・ハンガリー帝国版図下のトリエステの出身であった。母親はイタリア語とドイツ語が話せたようで、両親のコミュニケーション言語はドイツ語であったと言われている。
- 2 再評価の契機とは、具体的には1950年代、ペロン政権(1946-1955)下でその後のアルゼンチン文学批評で中心的な役割を担うこととなる批評家のダビッド・ビーニャス(David Viñas:1927-2011)らの文芸誌Contorno『コントロール』で大々的にアルトの特集が組まれたこと、そして1970年代、とりわけ1973-1983の軍政下、作家・批評家のリカルド・ピグリア(Ricardo Piglia:1941-2017)がアルゼンチン文学の古典を再構築する目論見を持ちながら何度もアルトをエッセイや小説に登場させたことの二つの動きがあげられる。
- 3 米国で出された二つの博士論文Ishii, 2000とSloan, 2003では両者ともにアルトの「発話」の位置、つまり、同時代の言説編成の中でアルトが誰に向けてどのような「声」を発していたのか、またそのことにどのような意義があるのかについて論じている。
- 4 「ブエノスアイレスのオカルト科学」に関しては、その後の小説でテーマとなる世界に跋扈する秘密結社のモチーフ、また、論文スタイルを取って文章に脚注を挿入するスタイルなど、その後のアルトの創作活動において重要な要素を多くはらんでいるテキストである。1981年にブエノスアイレスのEditorial Planetaが出版した3巻本の全集で一般的に読むことが可能になった。スペイン、マドリードの出版社

Editorial Drácena はこのエッセイを 2013 年、単行本の形で出版している。

- 5 当時の文人に支配的だった、「ナショナルなもの」とは失われたナショナルなものの再構築を意味する。その傾向はグイラルデスの小説、*Don segundo sombra* (1926) に顕著に反映されている。同小説は 1910 年代に国民古典として組み込まれた、 gaucho 文学の文学的コーパスを拾い上げ、当時すでに消え去ったと考えられ、郷愁の対象になっていた gaucho の牧歌的な世界を文学的に再構築し、消え去った「アルゼンチンの伝統」を再構築した小説であると言われている。
 - 6 『プロア』に掲載されたのは“Rengo”「レンゴ」、(Año segundo, No. 8, marzo de 1925)。そして『怒りの玩具』には組み込まれなかった短編“El poeta parroquial”「教区の詩人」を、(Año segundo, No. 10, mayo de 1925) に掲載している。
 - 7 当初アルトが考えていたデビュー作のタイトルは *La vida puerca* 『豚のような生活』だったが、グイラルデスの助言により *El juguete rabioso* 『怒りの玩具』に落ち着いたという。
 - 8 Modolo, 2016 によれば、アルゼンチンの総人口のセンサスが取られた時代のアルゼンチン全体の総人口は以下のように変化している。
1869: 1,830,214 1895: 4,044,911 1914: 7,903,662 1947: 15,893,811 (Modolo, 2016: 206)
 - 9 ブエノスアイレスに関してはブエノスアイレス自治市含む大都市圏「グラン・ブエノスアイレス」とブエノスアイレス州が明確にわけて論じられているもの、また註 8. で述べたセンサスの時代を通じたブエノスアイレスの人口変動をネイティブ・外国生まれの比率で分けたものを見つけれなかったため、現在のところは以下のデータを参照したい。
Walter, 2002 によれば 1914 年、と 1947 年のグラン・ブエノスアイレスのネイティブ・外国生まれの人口比率は以下

1914	ネイティブ: 266,244	外国生まれ: 191,973	総人口: 458,218
1947	ネイティブ: 1,310,401	外国生まれ: 430,937	総人口: 1,741,338

(Walter, 2002: 23)
- ちなみに林, 2003 は複数の文献からまとめた「ブエノスアイレス市」人口を述べているが、1887 年の人口と Walter, 2002 の 1914 の人口がほぼ拮抗しているため、おそらくこの人口は「ブエノスアイレス州」の人口であると考えられる。林, 2003 の論考に挙げられた人口は以下。
- | | | | |
|--------|------------------|----------------|----------------|
| 1855 年 | ネイティブ: 60,000 人 | 外国人: 33,000 人 | 総人口: 93,000 人 |
| 1887 年 | ネイティブ: 204,000 人 | 外国人: 228,000 人 | 総人口: 432,000 人 |
- (林, 2003: 345)
- また、Sarlo, 1988 によれば「ブエノスアイレス」の総人口は以下のように変動している。1914 年、総人口: 1,576,000 人、1936 年、総人口: 2,415,000 人 (Sarlo, 1988: 18) これもおそらく「グラン・ブエノスアイレス」ではなく「ブエノスアイレス州」の人口を指していると思われる。行政区分の変化と人口変動についての正確な把握は筆者の今後の課題とする。
- 10 そのクーデターをイデオロギー的側面から支えていたのが文人レオポルド・ルゴーンであり、ファシズムの運動に感化されたルゴーンはクーデターへの関与を 1924 年の *La hora de la espada* 「剣の時代」の演説および出版以降積極的に進行ようになった。このクーデターはその後アルゼンチンで何度も経験される政治への軍部の干渉の起点となるが、1930 年代の時点で、労働者組合が発行していた新聞以外の新聞では熱狂的に受け入れられたという側面がある (Montaldo, 2006c)。このことに関しては稿を改めて論じなければならない。
 - 11 二度アルゼンチンを訪れたスペインの知識人オルテガ・イ・ガセーの他、アンリ・ベルクソン、オズワルド・シュペングラー、ジョージ・バーナード・ショー、エウヘニオ・ドルス、ベネデット・クローチェ、アナトール・フランスが頻繁に読まれていたという (Montaldo, 2006b: 31)
 - 12 今回はこの事実に触れるにとどまるが、具体的にどの時期にどのような教育改革が行われ、移民を含めた住民たちの国民化政策としての識字教育が行われたのかには引き続き研究を深める必要がある。
 - 13 とはいえ、ゴンサレス・トゥニョン兄弟は、フロリダ派に寄稿しながらも、1933 年には短命には終わるものの、芸術的前衛性と左派路線の両方を明確に打ち出した雑誌 *Contra* 『コントラ』を創刊する。
 - 14 アルトの文体が持つ実験性は、筆者の見限り、ヨーロッパのモダニズム小説と似た手法を援用しながら、しかしおそらく文学的な影響関係にはなく、アルトが自ら発明した文体である。このことについて

は稿を改めて論じたい。

- 15 都市部の「郊外」・「周縁」を意味する単語をこのエッセイでボルヘスは4つ援用している。“las orillas”, “las afueras”, “el arrabal”, “el suburbio”である。ボルヘスはあくまで文学的系譜の中に自らの“las orillas”を位置づけている。
- 16 “Esos tangos antiguos, tan sobrados y tan blandos sobre su espinazo duro de hombría (...). Nada los iguala en literatura. Fray mocho y su continuador Félix Lima son la cotidianidad conversada del arrabal; Evaristo Carriego, la tristeza de su desgano y de su fracaso. Después vine yo (...) y dije antes que nadie, no los destinos, sino el paisaje de las afueras (...). Roberto Arlt y José S. Tallon son el descaro del arrabal, su bravura. Cada uno de nosotros ha dicho su retacito del suburbio: nadie lo ha dicho enteramente.” (Borges, 2011: 16)
 「それらの古いタンゴは男らしさが押し付ける厳しい苦悩に対して己惚れに満ち、同時に優しくもある(…)。文学にはそれに比肩するものがない。フライ・モチョと後継者のフェリックス・リマは場末で語られた日常である。エバリスト・カリエゴは憂鬱と失敗の悲しさを体現する。そのあと私が現れ、誰よりも先に郊外の宿命についてではなく、その景色を朗詠した(…)。ロベルト・アルトとホセ・タジョンは場末のふてぶてしさや凶暴性そのものだ。わたしたち一人一人は郊外の切れ端について語ってきたが、だれもその総体について語りきってはいない。」
- 17 ボルヘスの描く「郊外」“la orilla”に関しては Sarlo, Beatriz, King John (ed.), *Jorge Luis Borges: A Writer on the Edge*, London: Verso, 1993 に詳しい。
- 18 『エル・ムンド』にはフロリダ派を代表するコスモポリタンの詩人・作家、レオポルド・マレチャル (Leopoldo Marechal; 1900-1970) をはじめ、アルトの盟友であった社会派のコンラド・ナレ＝ロシュロ (Conrado Nalé Roxlo; 1898-1971) オラシオ・レガ＝モリーナ (Horacio Rega Molina; 1899-1957) らが寄稿していた。
- 19 フロリダ派の雑誌に寄稿しながらその後左派の路線を打ち出すラウル・ゴンサレス・トゥニヨンの他、ニコラス・オリバリ (Nicolás Olivari; 1900-1966)、サンティアゴ・ガンドゥグリア (Santiago Ganduglia; 1900-1983)、コルドバ・イトゥルブル (Córdova Iturburu; 1902-1977)、オラシオ・レガ＝モリーナ (Horacio Rega Molina; 1899-1957) が文学・文化やその他一般の記事を、フロリダ派のパブロ・ロハス・パス (Pablo Rojas Paz; 1896-1956) はサッカー・コラムを書いていた。
- 20 この時の犯罪記事を含めたクロニカ集は単行本化されている。Roberto Arlt, *El fascineroso y otros cuentos*, Buenos Aires: Del Nuevo Extremo, 2013
- 21 Ishii, 2000, “Chapter3. Writers” では、ボルヘスと『クリティカ』の関係、またボルヘスの創作と新聞連載の関係が詳細に論じられている。とりわけ *Historia universal de la infamia* 『汚辱の世界史』(1935) は新聞連載したものを再録したものであるという点、また新聞連載を創作の一段階と位置付けた点があると指摘している (Ishii, 2000: 110-143)。
- 22 Saïtta, 2009a: 247 には『エル・ムンド』紙に掲載された編集方針 (1928/5/14 付) が掲載されており、筆者が記述したのはその要約である。
- 23 『エル・ムンド』1932年10月22日付では「ボエド通りの芸術家のたまり場」と題したクロニカを掲載している。この時点でアルトは長編小説から離れ、短編小説の執筆と戯曲の執筆にフィクションの活動場所を移し始めていたが、社会派の代名詞である「ボエド」をクロニカのタイトルに使い、貧乏ではありながらも活気に満ちた工房の様子を綴っている。「ボエド派」を自任していたことが読み取れるクロニカである。
- 24 “La ciudad se queja” 「憤る都市」は当時の新聞から別の媒体に転載されていない。したがって日本にいる筆者にとってはアクセスが難しいが、この具体的なクロニカはアルトの社会性を分析する際、重要な点であるため、それらのクロニカの分析は今後の課題としたい。
- 25 Saïtta, 2009a によれば、当時の新聞三紙のクロニスタはいずれも都市の問題を独自の視点から切り取っていたという。アルトの『エル・ムンド』に先行する大衆紙『クリティカ』紙ではエンリケ、ラウルのゴンサレス・トゥニヨン兄弟が1925年から1931年にかけてアルゼンチンの場末をテーマにクロニカを記しており、高級紙から大衆向けに舵をやや切り始めた老舗新聞の『ラ・ナシオン』紙には1929年の1月から9月まで、作家であり測量技師でもあったラウル・スカラブリーニ＝オルティス (Raúl Scalabrini Ortiz; 1898-1959) が “A través de la Ciudad” 「都市を通じて」というクロニカを連載していた (Saïtta, 2009a: 248-254)